宇都宮大学教育学部紀要第六〇号発刊に寄せて

教育学部長　渡邊　弘

宇都宮大学教育学部紀要の前身である宇都宮大学学芸学部研究論集第一號が発刊されたのは、一九五〇年（昭和二十五）三月である。この前年に、新制国立大学・宇都宮大学が栃木師範学校・栃木青年師範学校、宇都宮農林専門学校を包括して、学芸学部と農学部の二学部が設立されている。敗戦後の当時は、民主国家、平和国家が声高に叫ばれる中で、再び朝鮮戦争勃発によって、しだいに米ソの冷戦構造の中に我が国も巻き込まれていこうとしていた頃であった。こうした中で、まだ紙質も悪く、教員の研究環境も必ずしも整備されているとはいえない状況の中で、研究論集第一號が十名の研究者の投稿によって産声を上げることになったのである。

その後、学芸学部研究論集は一九六五年（昭和四十）の第十五號まで続き、翌一九六六年（昭和四十一）に学芸学部が教育学部と改称するのに合わせて、第十六号（二部構成、十二月発行、二十七名投稿）から「宇都宮大学教育学部紀要」となり、新たなスタートを切り今日の第六十号に至っている。

そもそも紀要とは、一般的に大学または研究所が、その所管教員または研究員の学術論文を総合的に発表する雑誌であり、年一回発行するものが比較的多い。「学術」という言葉からも分かるとおり、その内容は学問・芸術全般にわたり、人文・社会・自然のそれぞれの科学領域におよぶものである。とりわけ、幅広い教養と専門的知識を備えた人間の形成を主たる目的とする本学部における紀要は、多様な専門の教員が存在することにより、いわばエンサイクロペディア的様相を呈している。

こうした六十年にも及ぶ本学部紀要の主たる目的は、〝より善き知の探求と創造〟である。そして、そこに生み出されてきたものは、学芸学部から教育学部に及ぶ多くの教員たちの人間的叡知と科学的知識との調和のもとに創造された“知の遺産の結晶”であるといえる。

人間は、本来愛智（フィロソフィア）的であり、常に〝善きもの〟に憧れ、そのかぎりにおいて、その憧れに叶うものとして〝善きもの〟を創り出さないではいられない存在と考えられる。そうした人間によって、善さへの憧れとして創り出されたものすべてが、新たな「文化」を形成していくための礎となり、社会への多大な知的貢献となっていくのである。つまり、六十年にわたる本学部の紀要は、多くの教員一人ひとりが自らの素地をカルティベイトしながら、新たな文化の創造と社会への貢献を目指して紡ぎ続けてきた知の探求の歴史的所産といえる。

だが、この文化の創造を目指した知の探求は、これからも限りなく継続していくものである。私は、研究者たちの知への情熱によって、今後も本学部の研究紀要がより一層充実したものとなっていくことを切に期待している。そのためには、一方で教員がじっくりと思索する時間が必要であり、他方では他者の論文を読み、相互に語り合う時間が必要である。紀要の充実は、教員（研究者）の精神的ゆとりと無縁でないことを最後に付言しておきたい。